

極限概念 (Grenzbegriff) としての文化價值

左右田 喜一郎

「價值の内容」言既に *Contradictio in adiecto* である。價值は、一方に當爲 (*Sollen*) として、形式として、無内容として立つに於てのみ意義ありとする他方に、其の形式たる價值に對して内容を求むることなくしては、當爲と存在 (*Sein*)、形式と内容との對立は、到底吾等が思惟上の空虚なる概念たるに止まつて一個の抽象に終り、何等哲學上の問題を解釋することを得ざらしむるのである。吾等は窮極に於て何等かの制限、何等かの意義に於て價值と内容との結合を求むることなくして止み能はぬ。茲處に永遠に亘りて哲學の問題が古くして而して常に新らしき所以が見られ得るのである。

今經濟哲學も一個の歴史的文化哲學としては其の問題、其の對象として超越的經濟的文化價值を有するものであるが、其の文化價值に係はりて經濟生活は認識論的

に可能となるが故に、逆に經濟生活の窮極の意義、歸趣は又此の經濟的文化價值の中に在りと云はねばならぬ。即ち經濟的文化價值は他の凡ての文化哲學に於けると同様に特殊科學の對象を可能ならしむる認識論的根基となると同時に、反面に於ては此の如き特殊科學に對して形而上學の對象を形成するものであると云ふことが出来る。而して此の如く解せられたる經濟的文化價值の關係すべき特殊科學たる經驗的經濟學に於て其の對象たるべき經濟生活の凡ゆる學的概念を形成するに際して、只單に無内容なる經濟的文化價值に理論的に係はらしむると云ふ丈では如何にして此の如き概念が形成せらるべきやは解せられ得べくもない。故に余は如何なる特殊科學に於ても此の無内容なる其の當爲に係はりて概念構成が成し遂げらるゝ際には、又別に一の其の特殊科學に特有なる概念あつて、其の概念が恰も他の凡ての概念に對しては論理的先天性を具有して居り、之によつて凡ての其の學に於ける概念は此の先天的概念の色彩を帯びて來なければならぬと思ふ。例へば人類の法律生活を認識論的に可能ならしむる法律的文化價值は無内容なる一個の當爲である、而して一個の法律學なる特殊科學に於て其の對象を形成する爲には、法律的文化價值に理論的に係はらしめて初めて概念的に可能となる際には、又必ず其

の法律學に特有なる且諸概念に對して先天性を有する一概念によつて *Begriffliche Umwälzung* を起して來るのでなければならぬと思ふ。即ち法律學に於て此の如き概念は何かと云へば權利義務の概念である。即ち此の概念によつて法律的文化價值に係はりて可能となり得る法律生活は、茲に一個の具象的の色彩、表明を得て來る様になるのである。今翻つて經濟學に於て此の如き先天的概念を求むれば余の從來の研究の結果に従へば、貨幣の外にはない。即ち經濟的文化價值に係はりて可能となりたる經濟生活は經濟學なる一特殊經驗科學の對象としては常に「貨幣」概念によつて *interpret* せられ得る場合、及びせらるゝ場合のみに限ると云はざるを得ない。即ち無内容の文化價值は法律生活に於ては權利義務の概念により、經濟生活に於ては貨幣概念によつて其の具象的表明を得べきものなりと云ふてよい。

以上の推論は余が從來種々の機會に於て試みた處であるが *insoweit* 余は誤まてりとは思ひ得ぬ。是から先き問題となるは法律生活に關して權利義務概念と法律的文化價值との關係の如く、經濟生活に對する貨幣概念と經濟的文化價值との關係如何と云ふ問題である。此の問題は假りに茲處には法律生活と經濟生活とに限りて云ふたけれども、如何なる社會生活及び其の關係する特殊科學につきても云ひ得る

こと思ふ。例へば政治生活、藝術生活、宗教生活等凡て夫々の範圍に於ける當爲としての文化價值によつて夫々の特殊科學例へば政治學、藝術學、宗教學等の對象が可能となる場合に、之に實際的、具象的表明を與ふる、其の學に特有なる先天的概念と云ふものは必ず存在しなければならぬ。例へば政治學ならば國家とか、國家的現象とか乃至國家の目的遂行とか、藝術學ならば自然の模寫とか、人格の内面的發展とか、宗教學ならば神に對する敬虔觀念とか、其の外的形式的表彰とか、夫々科學者に依つて異論はあらうけれども、兎も角無内容なる形式的文化價值を具象的に表明すべき其の特殊科學に特有なる先天的概念は必ずあるものである。之は雷に歴史的、文化諸學のみに限らない、自然科學でも同じである。究極の認識目的は普遍化概念構成による自然法則の樹立にあるとしても、或時代に於ては物理學は分子、化學は原子とか云ふ概念の關係に凡てを還元して見ると云ふ如く各學に特有なる一個の先天的概念は存在する、之が「エレクトロン」學說の稱道によつて其の根柢が動かされんとしつゝあるのであるけれども、只一以て他に代はると云ふ丈で其の原則に變化はない。

即ち或特殊科學に於ては無内容の形式たる當爲は其が丁度無内容の形式たるが故に、之に係はりて認識論的に可能となる特殊科學の對象に對して具象的の表明を

與ふることを得んが爲に、一個の其の學に特有なる先天的概念が存在せねばならぬと云ふことは明なことである。此の概念によりて凡ての其の學の概念は之に還元せられ得る範圍及びせらるゝ場合に於てのみ其の學の對象は形成せらるゝのである。

此に於て問題となるのは此の如き先天的概念と當爲との關係である。法律生活で云へば權利義務の概念と法律的文化價值との關係である。此の法律生活の場合の兩者の間の内的關係を見ることは稍々容易である。法律的文化價值を以て無内容ながら正義觀念の完成方面の窮極に立つものと云ふ様に見れば、之を歸趣とする法律生活全般が凡ての場合に於て權利義務及び其の遂行と云ふ如き實際的表明を得ると云ふことは解し易きことである。然らば經濟生活に於ては此の關係はどうかと云ふと、貨幣概念と經濟的文化價值との間の關係は法律學の場合の如くに之を見得ること容易でない。貨幣は余が屢々他の機會に於て闡説した如くに單純に經濟價值の數的、客觀的表彰たるものであるから、之より直に一個の文化價值に結び付けて考へ得べき連鎖は容易に發見し得られない様な氣がする。單純なる貨幣額の蓄積、通俗に云へば富の増加と云ふことと、經濟的文化價值なる當爲との間に直接な

る内的連鎖を考ふべしと要求せらるゝ場合には、寧ろ否定的の斷案を下すべき傾向すら吾等は有するのである。況んや世間通用語に於ても經濟と道德的當爲の如き文化價值とは背馳すると見る方が、相並行すると見るよりも普通なりと思はるゝ如き状態も、亦權利義務觀念の遂行が假りに法律的文化價值を内容的に制約する一要素が正義觀念なりとすれば之に適應するとか、又はカントの倫理說に従ふて法律行爲を其の内に含む倫理の當爲、不許不 (Sollen) は義務觀念にありとするものに對する如きとは甚だ趣きを異にして居るのである。經濟的文化價值と經驗的經濟學の先天的概念としての貨幣概念との關係は、吾等經濟學に關心を有するものが更に思索に耽るべきことを要求する問題である。然るに此の問題の解答あつて所謂經濟哲學も從つて之によつて經濟學も共に其の理論的基礎を得べきである。

此の困難なる關係を明にする爲には、多少當爲と存在、價值と内容とにつきて一般的の考察をなす必要がある。

二

所謂超越的心理學的方法に於ては其の係はるべき範圍内に於ては當爲は一個の

純形式であつて此の意義に於ては如何なる方法を以てしても存在より當爲を導くことを得ない、即ち兩者の間には一條の超ゆることを得ざる溝がある。此の意義に於てのみ價值は一個の形式であつて無内容である。乍併反對に超越的論理的方法によつて價值を其自身として論ずる場合には、他の諸價值間との關係は當爲たる形式としては凡て同じである、と云ふの理由を以て此の方面より見れば凡て無差別であるが、他の方面即ち内容の點から見れば區別もせられ階級もつけられ、比較もせられなければならぬ。此の意義に於ては美は眞と區別せられ、眞は善と比較せられて茲に所謂諸價值の哲學(Philosophie der Werte)の體系は可能となるべきである。此くして夫々の文化價值の相互の間の差別、比較も可能となり、更に凡て此等を超ゆる又は其の背後に横はる統一も論ぜらるべきである。即ち無内容なる當爲、價值は其の特殊科學の對象に對しては純形式にして何等の内容的制約を許さざるべきも、一旦立場を變へれば善は眞とも美とも正義とも區別せらるべき何等かの意義に於ける内容上の差別がなければならぬ。二以上の文化價值が存在すと云ふは内容上に於て差別あるに非ざれば無意義の言葉である。

此の如く價值に内容的制約を許す立場は即ち超越的論理的立場であり、反之特殊

科學の如何なる概念よりしても之より價値に對する場合には之に何等の内容的制約をも許さずとする立場は即ち超越的心理的立場である。依つて之を見れば一特殊科學茲處には經濟學の先天的概念たる貨幣概念の經濟的文化價値に對する關係、換言すれば經濟學上の凡ゆる概念即ち經濟生活たる存在(Existenz)の經濟的文化價値なる當爲(Sollen)に對する關係を釋ねんとするには、二の異なつた立場を統一の或立場に引き直ほさなければ出來ぬ仕事である。即ち一方は超越的論理的立場によつて經濟的文化價値の他文化價値に對する關係地位等を決定して其の内容的制約の性質を明にし、さて他方超越的心理的立場に歸つて貨幣概念と此の内容的制約との間に如何なる關係換言すれば如何なる實質的、内容的聯絡があるかと云ふことを見るを要するのである。若し貨幣概念がかくの如き先天的概念として誤まれるものなりとすれば之を排して他の概念を拉し來ることは經驗的經濟學の任であるが、兎も角何等かの先天的概念を立ずるとしても、此の今釋ねんとする關係の究明が理論上不可能であると云ふならば、如何なる先天的概念を立しても其の妥當を檢する最後の根據はあり得ないと云ふことにならなければならぬ。従つて此の如き先天的概念を立すると云ふことが一特殊科學に於てなし得べき又なさざるべからざること

なりとする余の主張には其の理論的根據に變化を起さなければならぬと云ふこととなる。之は特殊科學としてのみならず、一般に認識論殊に方法論の論議として頗る興味ある且重要なる問題と云はねばならぬ。

假令超越的論理的方法によつて諸價値を其自身に自足的に成立するものとして之を *begründen* し得たりとするも、其の諸價値間の關係を定むる爲に與へらるゝ内容的制約は無前提なるを得ず又根據なく獨斷的なることを得ない、必ず依つて來る根據若しくは緣由は各特殊科學の實際的具象的對象の中に在らざるべからざること、は明である。是價値又は當爲によつて特殊科學の對象が認識論的に可能となり兼ねて又其の歸趣を示すものであると云ふ二重の關係によつて明に知らるべきことである。即ち此の意義に於ては價値の内容を定むる根據又は緣由は各特殊科學の對象にありと云はなければならぬ。例之道德的行爲と云ふこと全く無くして善なる當爲を見るべくもないと云ふ如きものである。尤も此の場合に道德的行爲なる *Sollen* を離れて善なる當爲が先天的に無上命令として存し得るとするカントの主張の意を度外視してはならない。存在を可能ならしむるものは當爲であるけれど、も其の當爲に根據を與ふるものは亦存在なりと云ふ此の關係は正當に解釋せらる

べくして誤解あることを許さず。茲處に循環論法を見んとするものは直接經驗と思惟、純粹持續と學問との關係につきて透徹の考察を回らし得ぬものに過ぎなす。

此の如く概念的に分たれたる超越的論理的方法による價值の内容的制約と、超越的心理的方法による價值の無内容的形式性に對する特殊科學の對象たる内容即ち換言すれば之をして特殊科學の範圍内に於て可能ならしめたる還元の *Knotenpunkt* とも云ふべき特殊科學の先天的概念、經濟學に於ては貨幣概念との間には何等かの流通がなければならぬと云ふことは窺ひ知らるべき其の間の消息である。各特殊科學の對象全部は此の如き特殊科學の先天的概念を通じてのみ可能であるから、特殊科學の内容全部と其の學の當爲たる文化價值との間に一定の流通融通がありや否やを見んとするには、此の如き特殊科學の先天的概念と其の學の當爲との間に内容的、實質的の關係、流通ありや否やを検するを以て足りる。而して此の兩者の間の流通を許すことなくしては存在と當爲との相關關係は立證せられ、基礎づけられ得ぬ。然らば其の之を可能なりとする立場は何か。其の可能は如何にして證據づけらるゝか。即ち一般的に云ふて價值と内容 *Sollen* と *Sein* とは如何にして其の間に聯絡がつけらるゝか。

余は此の場合に Bergson と共に *Révolution créatrice* に隠れたくない。Cohen と共に凡ての始めに *der erzeugende Punkt* を見たくない。西田博士と共に内面的發展を許す直接經驗に逃げたくない。ich ist non-ich を思ひ、Thesis は Antithesis を豫想する如く其の根柢に於て反對を打つて一丸とする流動の力を見得るものにとつてはカントは單純なる一個の迂回のみではなく又或論者の云ふ如く一個の邪道であらう。されど「自然法則はなければならぬと云ふ自然法則はあり得ない」と云ふ一句に思惟の峻嚴を見得る吾等は、茲處に合理性と非合理性との間に流通流動の活力的發展を見んとするものを以て此の論理の峻嚴に驚いて轉じて他に活路を求めたものと云はざるを得ないと思ふ。カントを超えずしてカントを避くるまでにカントは行き詰まつて居るか。之は恐く考へものではなからうか。

三

余は此の問題を考ふるに於て價值當爲は一面無内容でありながら他面内容に關する處ある所以を其の論理的構造の解剖によつて理解して見たいと思ふ。

此の點を理解する爲めに試に左の數理式を考へて見たい。即ち

$$\lim_{n \rightarrow \infty} X_n = A$$

の一般算式によつて例之

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{4} + \frac{1}{8} + \dots + \frac{1}{2^n} \right) = 2$$

又は

$$\lim_{n \rightarrow 0} \frac{\sin Z}{Z} = 1$$

の如きを考へるか、又圓周と内接正多角形の邊の數を無限大になしたる場合の邊の和との差は無限小になすことを得ると同様に、圓の面積は之に内接又は外接したる正多角形の邊の數を無限大になしたる場合の面積の極限なりと云ふ場合の如く、凡て此等の例に於ける極限の場合を考へて見るのに、各々の場合に於て數理式の左側又は前半と右側又は後半との間には數學者の意見に反對して吾等は茲に必ず思想上の *gap* があると云ふことを見んとするのである。上の例の内の一をとつて見る

に、 2 と $\left(1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{4} + \frac{1}{8} + \dots + \frac{1}{2^{n-1}}\right)$ との差は n が無量大となつた場合に於ても常に $\frac{1}{2^n}$ である。假令 n が如何に大となつても即ち $\frac{1}{2^n}$ が如何に小となつても吾々は此の場合の極限 2 に達する爲には常に一個の思想上の飛び越しを要求する。他の例に於ても皆同様である。只極限を極限なりと考へ得るは、算式の一方が此の極限に對する方向が與へられてあることが確である爲に之に *einseitige Steigerung* を許すからである。即ち其の方向が與へられてあること、其の方向の單純なる一方的高昇によつて此の極限が與へらるゝのである。

當爲と存在價値と内容を考ふる毎に、余は常に此の數學上の極限概念に想ひ到らざるを得ない。

例之意識一般と云ふ當爲を考へて見る。生理的個我から心理的個我に移り、判斷意識から超個的意識一般となると例へば Rickert: *Der Gegenstand der Erkenntnis*, 2. A. S. 142 ff.)云ふが此の場合の意識一般は一個の *Ideal* であるから内容上は一個の *Idee* であり決して實現せらるゝことあるなしと云ふは、恰も生理的個我から心理的個我、判斷意識に移るの方向が與へられたる場合に於ては、其の方向に於ける窮極までの一方的高昇が此の極限概念たる超個的意識一般なる當爲に到らざるを得ないのである。

而して此の場合に凡ての内容から此の形式たる意識一般に移る場合には、どうしても一個の思想上の *essence* があると思はざるを得ないと思ふ。

當爲と存在價值と内容とは常に此の關係に於て見るべきではないか。此の思想上の基礎づけられたる一個の飛び越しがあるから、所謂超越的心理學的方法によつて内容より發足して當爲を立する場合には、遂に窮極に於て超ゆることを得ざる一條の鴻溝を横へるを感ぜざるを得ないのである。而かも其の當爲を妥當ならずと感じ得ざるは、極限概念の如く内容に既に一個の確定したる方向が與へられてある以上其の方向に於ける一方的高擧を許さずと云ふことが云へないからである。即ち一方的高擧に既に確定したる内容上の方向が與へられてあると云ふ確實な基礎があるからである。只最後に於て假令實質上無限小なりと雖も吾等の思想上には一個の飛び越えがある。此の飛び越えを妥當なりとするや否やが要するに凡ゆる認識論上、哲學上の思想の分岐の根原をなすものなりと云はざるを得ない。

再び次の數理式を考へて見るに

$$\lim_{n=\infty} \left(\frac{7}{10} + \frac{7}{100} + \frac{7}{1000} \cdots + \frac{7}{10^n} \right) = \frac{7}{9}$$

に於て $\frac{1}{10} + \frac{1}{100} + \frac{1}{1000} + \dots + \frac{1}{10^n}$ と $\frac{1}{9}$ との差は $\frac{1}{9 \cdot 10^n}$ であるが、之は假令 n が無限大となりても吾等の思想の上には嚴として残るのである。所謂當爲と存在との間に存する一條の鴻溝なるものは實際上如何に輕微にして *vernachlässigen* し得るものでも思想上には嚴として存在すべきものである。此の算式に於ける兩數の差たる $\frac{1}{9 \cdot 10^n}$ は哲學上に引き直ほして考ふれば凡ゆる哲學上の困難なる問題の根原をなすものである。之を如何に解すべきかによつて殆ど凡ての哲學上の根本問題は決せらるゝと云ふも決して過言ではないと思ふ。

數學上に見れば上述の如く凡て極限の觀念あるが爲に、無限大及び無限小の概念に於て常に一個の飛躍を豫想する。例へば有限數に對して無限小の量を増加するも減少するも其の有限量は變化することなしとか、又は無限大に増加する數量に對しては如何なる有限量を増減するも無限大なるに變化なしとか云ふのは、其の無限小及び無限大に對して或は零或は ∞ を其の極限として豫想するからである。此の極限に達するに當つて思想上の飛躍を許すことなくしては例へば $90^\circ \parallel 8$ の式の如きは三角形の二角を以て既に二直角を形成せしむべき一個の無意義の表言に過ぎざるものとなり終るのである。此の極限を許せばこそ達するに當つて九十度に

達する迄の範圍内の凡ての角度に對して此の式が意義あることとなる。而も一個の思想上の飛躍を許し而して其の結果は性質全く實在と相反する又は相容れざるものとなることを認むることなくしては $\sin \infty = 1$ の公式は立せられ得ぬものと云はなければならぬ。

此の考へは當爲と存在とを考ふる場合に深く想を致さねばならぬ思想ではないかと思ふ。只數學家は有限量に對して無限小量の増減は *vernachlässigen* し得ることも出来るし、無限大量に對しては有限量は又等しく關する所なしとし得るから凡ての極限の問題が容易に解釋せられ得るけれども、認識論に於ては之は嚴然として其の間に融通を許さぬものがある所に難點があるのである。即ち數學家が思想上の飛躍を見ざる邊に認識論家は之に反して之を見ざるを得ずとする所に凡ての困難の根原が横はるのである。之が即ち解釋を要求する問題の核心である。

四

此の如く價值と内容との關係は數學上の極限の概念に似たるものがあるけれども、只數學家の考ふる點と認識論家の考ふべき點との間には一の顯著なる差異があ

ることは覆ふべからざることである。即ち數學上に於て所謂 *vernachlässigen* し得る量は如何に無限小なる量なりと雖も公式的に一定し得るに反して認識論家には之が一定の公式を以て表はし得ぬと云ふことである。例之最初に例として出した公式 $\lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{4} + \frac{1}{8} + \dots + \frac{1}{2^n}\right) = 2$ に於て $\left(1 + \frac{1}{k} + \frac{1}{4} + \frac{1}{8} + \dots + \frac{1}{2^n}\right)$ と 2 との間に於て兩者の差としての無限小量は $1/2^n$ である。此の極小量は或一定の内容が趨くべき方向が確定的に與へられたる時には、其の内容が極限に達する場合に於て補足さるべき一定量である。而して其の補充さるべき極小量は n が如何に無限大となる場合でも即ち n の内容値が變化し得ることを許すとしても常に公式的に一定し得べきものである。量の上に於て數學家は之を *vernachlässigen* するけれども思想上に於ては其の *sup* を埋むべきものは常に一定して居るのである。

認識論に於ては超越的心理的方法に於て内容より價值 *Sein* より *Sollen* に上る場合に於ては其の走るべき方向が確定的に與へられたる場合に於て其の最後に *vernachlässigen* せらるべきものが何であるかと云ふことは勿論一定の公式を以て表はすことは出来ない。 *Sein* より *Sollen* に上る場合に於ては寧ろ數を以て表はすことを得ざる不斷の連續があるのみである。之は兩者間の顯著なる差異と云ふことが出来

る。

併し翻つて考へて見れば此の如きものも只一定の公式を以て表はすことを得ぬと云ふ丈のことであつて、*gesetz*として認めらるべきものが何であるかは認識論家に思想上明かなることであるのは、數學上の極限概念を考ふる場合と少しも變はりはない。且一内容が其の *gesetz* を超えて極限に達したる場合には性質或は全く相反し或は全く矛盾するものゝ出現を期せざるべからざることも共に一である。即ち無限大及び無限小の概念の助けによつて或一定の方向を確定的に與へられたる内容が極限に達すると云ふ數學上の考へは、一内容が超越的心理學的方法によつて一方的に高擧せられて形式として當爲としての價値に到達すると全く同様ではないかと余には思はれる。經驗法則より發足して遂に普遍妥當性を具有する自然法則に到り得とするのも亦同様なる認識論上の一例ではないかと思ふ。即ち一般的に云ふて凡ての價値は内容の極限概念として考へらるべきものではないか。是余の多年の間抱く疑問であつて解明を欲する難問である。

カントが其の倫理學の樹立に於て如何にして無上命令 (*ein kategorischer Imperativ*) は「可能なりやと云ふことを立證せんとする條下例之 (*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*、

Akademie-Ausgabe. Bd. IV. S. 453. ff. の如き)に於て凡ての人類が一個の理性的存在 (ein vernünftiges Wesen) として考へらるゝときには、一方に於ては睿知界 (intelligibele Welt) の一員として考へられ、他方感性界 (Sinnenwelt) の一員として考へらるゝが故に、道徳上の當爲 (Das moralische Sollen) は前者の場合に於ては内面的必然的意欲 (eigenes notwendiges Wollen) たりと雖も、後者の場合即ち感性界に屬する一員として見らるゝ場合に於ては、之が本然の意義に於て Sollen 當爲として考へらるゝことを得と云ふ立言は、所謂頭は天に向ひ足は地に接する吾等人類の凡ゆる價值、凡ゆる當爲に對する態度を最もよく表明したるものである。價值又は當爲は常に内容又は實在の立場より考へられたる場合に於ては其の一定の方向に於て遂に達すべき極限を示す處の一個の Sollen である。此の場合に於ては 1890° も 190° も考へ得べきである。而かも此の極限、此の當爲に達するとすれば凡ての内容は其の意義に於て茲に一の引線り返へしを見ざるを得ない。否、從來の一定の方向に進み來つた内容の意義に於ては極限に達したるものは時には反對又は少くとも矛盾の意義を含むものと解し得られざることもない。而も尙一定の方向を與へられたる内容と全く關係することなくしては凡ての當爲、凡ての極限は畢竟無意義に終るのである。此の不即不離の關係は常に道徳

的當爲の場合のみに止まらず一切の當爲、一切の價值、一切の極限概念に於て見らるゝ關係である。

此の意義に於て「Philosophie der Grenzbegriffe」は少くとも余自身には深甚の意味を語るものである。カント以後直ちに立つて Grenzbegriff を説いた轆軻不遇の一猶太哲人 Salomon Maimon より降つて天資の大才を抱いて不幸夭折した Benno Kerry に至るまで未だ曾つて「極限概念の哲學」は其の萌芽を發したるのみで花咲き實結ぶの域に達して居ない。余は深く之を憾みとするのである。勿論數學上の極限概念と認識論上の價值とが同一思想より來ると断定し得たとした丈では更に之より此の如き兩者の共に根ざす基礎的根本思想の究明を要求すると云ふことに寸毫の微なりとも影響を及ぼしはせぬ。乍併 Philosophie der Werte は或一面に於て Philosophie der Grenzbegriffe として解釋し得るものであると云ふことを悟るは決して何物をも語るものにはあらずと云ひ得ないと思ふ。

五

以上の如く Sollen 價值は一定の方向を與へられたる内容の極限概念であると云

ふならば諸價値は其自身として考へられたる場合に於て夫々内容的制約を許すと云ふことは寧ろ當然と云はざるを得ないと思ふ。同時に他方に其の個々の價値が其の係はる範圍内に於ては其の内容に對して純形式に止まつて何等の内容的制約を許さぬと云ふことも容易に諒解し得ることと思ふ。只茲に一個の難點は前にも云つた様に即ち一定の方向を與へられたる内容の窮極に於て見ざるを得ざる思想上の飛躍である。

此の思想上の飛躍が一個の *Konvention* に過ぎないか。認識論上如何なる性質を有するものか。恐く凡ゆる哲學上の認識論的論争點は此の一點の解釋の相違に由來しないであらうか。此の思想上の飛び超えによつてカントの例示を藉りて曰へば空中の凡ての鳩は皆眞空中に其の翼を張りて自由自在に飛躍する様な單純な空想となつてしまひはせぬか。カント以來吾等が排するに慣れたる形而上學に反對して *Stellen* 價値を妥當なりとするに際して、此の思想上の飛躍を許さんとするには其の認識論上の性質根據は果して之を如何に解釋すべきか。所謂思想上の飛躍あるにも不拘尙且空想的形而上學に於て思想の際限なき飛躍を許すことに反對して價値當爲は之を所謂極限概念なりと解釋することによつて其の飛躍の極限が明示

さるゝとするの根據は果して何處に在り得べきか。一方に飛躍の自由を許しながら他方に極限の制限を置かんとするは抑々何によりて可能なるべきか。換言すれば價值を極限概念なりと解釋することによりて、SollenはSeinを可能ならしむると同時にSollenの歸趣、問題を示す所以なりとする消息は遺憾なく解釋せらるゝことを得るとして、一定の方向を與へられたるSollenの窮極としてのSollenに達する間に見ざるを得ざる思想上のSeinは抑々吾等は之を如何に解釋すべきかと云ふ問題は正さに吾等に其の解明を要求すべきものである。

依つて考ふるに此の場合に於て思想上のSeinを填充し即ち與へられたる方向に趨ける内容の擴充又は抽象によつて極限に導くべきものはこれまで一定の與へられたる方向に發展しつゝ來つた内容の全部を無意義ならしめ又は其の存在を根本より覆すべき様の矛盾を其の中に包含することを得ずと云ふことは明かである。即ち所謂思想上の飛躍は其の與へられたる一定の方向に適從し一定の限界に到達すべきものである。従つて其の飛躍は一定の與へられたる方向なるものを惑亂せしめ得ざる先天の約束がある、其の止まるべき限界が明示されてあらねばならぬ。即ち其の思想上の飛躍には性質上及び程度上の限界と制約とが先天的に確定せら

れて居ると云はねばならぬ。果して然らば之を反言すれば其の極限概念あつて初めて凡ての内容に其の一定の方向なるものが興へらるゝものであつて其の所謂一定の方向なるものは極限概念によつて制約せらるべきである。換言すれば内容に其の一定の方向を興ふるものは極限概念其自身であると云はねばならぬ、何となれば内容を一定の方向に一系列に配置し得る所以のものは即ち此の極限概念あるからである。此の意義に於て Sollen が Sein を可能ならしめ得るのであつて、従つて其の如何なる部分と雖も皆 Sollen に導かるべき、同じ方向に趨くべき性質を有するものである。依つて Sein が一定の方向に走りて Sollen が其の極限概念として現出すると見るは寧ろ反對の見であつて、正當に云へば却つて Sollen が Sein に對して一定の走るべき方向を興ふるものであり此の意義に於て Sollen が其の凡ての Sein を可能ならしむるものである。(Lotze: Noeh immer bin ich der Überzeugung, auf dem rechten Wege zu sein, wenn ich in dem, was sein soll, den Grund dessen suche, was ist.)

此の如く觀じ來れば Sollen の樹立によりて所謂思想上の sup. は Sollen に支配せられて當然最後に überdrücken せらるべき性質のものとなつて來るのみならず Sein に對して一定の方向を興ふること其自身が既に最初に於て überdrücken せらるべき思想

上の Sein なりと云ひ得ざるにもあらざるのである。即ち論理上 Sollen は如何なる意義に於ても Sein に對して先天的ならざるべからずと云ふの意味は茲處に在る。 Sollen は其自身として Sein に一定の方向を與ふるもの即ち Sein を可能ならしむるもの兼ねて Sein の極限窮極を示すものである。

六

此の如くして當爲を以て Sein の極限概念なりと解釋するに當つて先づ必要なるは其の Sein を可能ならしむる Sollen の内的構造如何と云ふことである。然るに此の場合其の Sollen の内的構造性質を定むるに際しては又其自身によつて初めて可能となるべし Sein を離れては Sollen の解釋は全く不可能となるべきものである。此の如く Sollen は Sein に Sein は Sollen に倚屬する相關關係の存在すると云ふ事實は哲學上の Relativismus を以て一面の眞理を語るものなりとせしむる所以であるけれども、是到底自己の眼を以て自己の眼を見んと欲するものに等しい。依つて Sein を解し Sollen を悟らんとするものは Sein にも屬せず Sollen にも屬せざる立場か、若くは Sein 即 Sollen, Sollen 即 Sein の立場に在らざるべからざることは見易きの理である。而して

天地間の如何なるものと雖も前者の立場に立ち得ざることとは明かであるから後者即ち換言すれば *Sein* と *Sollen* とを内的に統一する立場に在らざるべからざることも明かである。即ち *Sein* の内に *Sollen* を見、*Sollen* の内に *Sein* を見る立場換言すれば *Sein* と *Sollen* の意義に於て見、*Sollen* を *Sein* の意義に於て見るところを要するのである。*Sollen* の問題は茲に在る。

畢竟本問題は之を換言すれば一個の特定の認識目的を立して此の方面に於て *Sein* を制約し *Sein* を認識し之を可能ならしむると云ふことに外ならぬ。*Sein* と *Sollen* とを内的に統一する立場は一個特定の認識目的を立する場合に明かに表明せらる。此の如き特定の認識目的を立するは何によるかと云ふことは素是其の係はるべき範囲内に於ける *Sein* 及び *Sollen* を超越したる立場によつて解釋せらるべきことである。例を以て云へば自然法則の樹立以外に他の諸種の文化生活と並んで而して此等と區別せられて經濟生活を一個の歴史生活として認識せんとする場合の如く特定の認識目的を立して或特定の生活内容を解釋せんとすること其自身は、經濟的文化價值なる *Sollen* 及び之によつて認識論的に可能となる經濟生活なる *Sein* の兩者を超越したる第三の立場によつて其の可能、適否を論ぜらるべきことであつて此の特

殊の Sollen 及び Sein 其のものゝ範圍内に於て云爲せらるべきことではない。只此の如き或認識目的を立すると云ふことによつて Sollen 及び Sein の關係は歸一的に解釋せられ得べきものである。果して然らば Sollen と Sein との相關關係を解釋せしむべき捷徑は此の如くして其の立せられたる認識目的の解釋にありと云ふことを得べきである。或特定の認識目的が一旦立せられたりと云ふことによつて一方 Sollen には其の内容的制約が附與せられ、他方 Sein には一定の方向が與へられ即ち一般的に云ふて可能となり且其の一系列の配置の窮極に於ける極限として Sollen が考へられ得るに至るのである。即ち問題は一に懸つて認識目的の如何に係はると云ふことを得るに至る。

茲に於て價值、當爲が内容、存在に對して極限概念をなすものなりとして此の兩者の關係を解釋せんとするに際して其の問題の中心點をなすものは何かと云へば其の特殊の價值、當爲を立する認識目的が如何に解せらるべきかと云ふ點にある。例を以て曰へば經濟的文化價值が個々の特殊の經濟生活の一系列に對して一定の方向を與へ即ち之を一般的に云ふて認識論的に可能ならしめ且其の窮極に於ける極限概念として存在すると云ふ事は即ち經濟生活を自然科學の對象とせずして或特定

の歴史的文化生活として觀察せんとする認識目的に副ふものであつて、此の認識目的の確立によつて經濟現象の範圍内に於ける當爲と存在、價値と内容との前述相關關係は茲に集中點、歸一點を發見し得らるゝのである。此の如き認識目的と他の歴史學の認識目的乃至自然科学的認識目的との關係を論ずることが問題の中心點となる譯である。

依つて茲に問題となるは例へば經濟學の認識目的を立するに際して自然科学の認識目的と區別せらるゝ所以の立證は暫くウキンデルバンド、リッケルト等に譲るとして他の史學の認識目的と區別して存在し得べき理由は何處に在るかと云ふことである。此の場合此の如き認識目的を立するに尙能く之によつて始めて可能となるべき經濟學の對象を豫想することなくして止み得るか。斯學の認識目的として經濟生活を歴史生活として觀察する爲には經濟的文化價値並に之によりて可能となる經濟生活全般を豫想することなくして他の史學の認識目的と區別せられ得る所以が立證せらるゝか。即ち經濟生活なる内容的概念を前提することなくして經濟學の認識目的其自身は立せられ得るか。換言すれば茲處にも先づ確立するを要するものと之によつて次に初めて規定せらるゝものとの間に循環論法を許す Poln-

ivismusに陥らずして止み得るか。

此の問題を解くには再び前に曰ふた通り畢竟 Sein の内に Sollen を見、Sollen の内に Sein を見ること換言すれば Sein を Sollen の意義に於て見、Sollen を Sein の意義に於て見、Sollen を Sein とは結び付いて之を全體として其自身完了したる一體 (ein in sich geschlossenes Wesen) をなすものと考へることを要する。例を以て曰へば經濟的文化價值と之によりて可能となる經濟生活全般とは結び付いて其自身完了したる一體をなして、他の文化價值と之により可能となる特定の文化生活と結び付いて一體となれるものと並立し得ると見るを要するのである。此の如く Sein と Sollen と結び付きて自足的の一體をなせるものが文化生活の種類により種々にあり得べしと余は考へる。然るに此の如く夫々の其自身完了したる一體が如何にして可能となり得るやの根據は此の一體をなす範圍より離れて其の外に立つて初めて求め得べきであつて、茲に問題は此の場合に文化生活の種類により或は學術的或は藝術的或は宗教的或は法律的或は經濟的或は倫理的等の文化生活と考へられて區別せらるゝ所以は何處に最後の論據を求め得べきかと云ふことである。自然科学と歴史的文化學とを立する論據は別にあらう。茲に問題となる

は文化學の中にあつて此の如き區別ある *Sollen* と之により可能となる *Sein* 全般とを結合せしむる所以の謂はゞ高次的區別の根原は何處にあるかと云ふことである。之は先天的なり得るや又は其の内容を豫想し逆に初めて此の如き區別が可能となるものか。問題は茲處に在る。

此の場合に於て此の如き區別が全然前提なく天下りの先天的なり得ざること
は明瞭である。自然科学と歴史的文化學との區別ある認識目的の樹立とても此の
意味に於ける先天的に非ざることとは明かである。如何なる學問の方法論的論議に
於ても常に學問の取扱ふべき根原素材として所謂直接經驗とも云ふべきものは常
に之を原始に於て前提するを要する。之を何等かの意義に於て *begrifflich* に *beurteilt*。
するに於て種々の學問が成立するのである。此の學問が種々に分たるゝは畢竟
此の如き概念的修整を施す吾等思惟の論理的構造が與へられたる何等かの意義に
於ける材料に對する態度及び能力によりて決定せらるゝのである。即ち諸學問の
方法論上の區別は依つて此くあらしむる思惟の論理的構造の側を考ふる場合に於
ては先天的なりと稱し得、何等かの意義に於ける材料、素材の側より考へらるゝ場合
には後天的なりと稱し得、又内容によりて制約せらるゝと解し得るのである。直接經

驗を概念によりて模寫することを得ずとの理由により他の方法論上の可能性生じ來り普遍化概念に一定の限界あることを知るによりて其の必然性生じ茲に史學は樹立せらるゝと同様に歴史的認識も亦吾等が思惟の論理的構造と認識素材に對する態度及び能力によりて之を總括的文化價値に係はらしめて認識せらるゝ場合も起れば又凡ゆる特殊の文化價値に係はらしめて認識せらるゝ場合も起り得。共に更に深く探究を要すべき理論的根據によりて一定の認識限界を有し得又有せざるべからざることば明である。此の場合に諸文化價値の區別ある所以は吾等が認識能力及び態度の論理的構造の側よりすれば先天的なりと云ひ得ると同時に單一化概念構成を或意味に於て強ゆる所謂内容的制約の側より論ずれば後天的なりと云はざるを得ない。此くして *Sein* と *Sollen* との相關關係の問題は再び茲處にも繰返さるゝに至るのである。

此の場合に諸文化價値の區別せらるゝ高次的根原の性質を論ずる上に於て更に一步を進めて考へて見る。即ち此の如く各種の區別せられたる諸文化價値と文化生活と結付きて一體をなしたる數種の其自身完了したる自足體と總括的文化價値一般との關係を見るに此の場合にも亦兩者の間に *Sein* と *Sollen* との關係を繰返すも

のと余には思はれる。即ち區別せられたる諸文化價値の自足體の極限概念として文化價値一般が立ち恰も各種の文化價値の自足體全部は一方の地位にあつて他方より *Sollen* としての文化價値一般に對するものと解し得らるゝと思ふ。果して然らば此の場合丁度 *esse* の地位にある諸文化價値及び其の自足體の意味を語るものは *Sollen* たる文化價値一般であると云はねばならぬ。又逆に文化價値一般の意味を語るものは各種の文化價値及び其の自足體でなければならぬ。即ち *esse* の内に *Sollen* を見、*Sollen* の内に *esse* を見る立場に立つものでなければならぬ。此の如くして前に曰ふた如く *Sein* と *Sollen* とは統一の立場に結び付いて其自身完了したる自足的一體として可能となり得る如く、諸文化價値の自足體と文化價値一般とは此の場合にも復結び付きて統一的に自足的に一體をなすものと考へ得らるゝと思ふ。此の如く一體となりたる歴史的認識の全體は又更に進むで自然科学的認識の全部と並列し且一體となりて復茲處にも *Sein* と *Sollen* との相關係を現出して所謂概念前期直接經驗に對すること、正に *Sein* に何等かの思想上の *esse* を許して *Sollen* なる極限概念に對するものと同様の關係にありはせぬかと思はれる。

此の如く *Sein* と *Sollen* との相關係は第一次より第二次、第二次より第三次と次第

に高次元に進むで夫々の階段に於て繰返され *Sein* に對して *Sollen* は常に極限概念の考へを以て解釋し得らるゝことと思ふ。而して遂に窮極は所謂概念前期直接經驗と思惟其のものとの解釋の中に入らざるを得ないのである。即ち合理性と非合理性との問題の中に入らざるを得ないのである。只吾等は *Sein* と *Sollen* との問題を考ふる場合には普通何れか一の次元に於て此關係を切離して考察するに過ぎない。

此の如くして *Sein* と *Sollen* との相關關係、不即不離の問題は解釋せらるべきものと信ずる。而して其の窮極の根原は要するに *Sollen* 價值を以て *Sein* 内容の極限概念なりと解釋することに在る。之によりて *Sollen* は *Sein* に對して抑々之を可能ならしめ、之に對して一個の確定したる方向を與へ而して其の窮極の極限として兼ねて其の歸趣を示すものとして立ち得るものなりと解釋し得べしと思ふ。

余は本論に於て當面の問題として文化價值より入つて之を以て極限概念なりとして取扱ふたが以上の推論に依つて凡ての價值凡ての當爲に對しても亦之を内容存在の極限概念なりと解釋して誤まりなしと信ずる。即ち當爲の哲學、價值の哲學は換言すれば「極限概念の哲學」なりと解釋すべきものではないか。是余が茲に敢て提言して見たいと思ふ要旨である。

余は今茲に一例として以上の一般的考察から歸つて特殊の問題を擧げて之を考へて見たい。即ち經濟生活を歴史生活として解釋せんとするに當つて其の當爲たる經濟的文化價值と其の之によりて認識論的に可能となり一定の方向が與へらるゝ内容たる經濟生活の凡ての現象の收結點歸一點として之に概念的引線り返へしを與ふべき貨幣概念との内的實質的關係を如何に解釋すべきや、即ち當爲としての超越的經濟的文化價值と存在としての經濟學上諸概念の先天的概念結合點としての貨幣概念との關係如何と云ふことの問題に歸つて之を解釋して見たい。

此の兩者の關係を見るに即ち經驗的經濟學の範圍内に於ては貨幣概念によつて解釋せられ得べき場合及びせらるゝ場合にのみ限つて經濟學の對象は可能となり、之により經濟現象乃至生活は一定の與へられたる方向に配列せられて其の窮極に於て形式概念、極限概念としての超越的經濟的文化價值が嚴存すると見ること前に述べた通りであるが、此の如く貨幣概念の仲介によつて可能となる經濟學の對象たる經濟生活の最後、窮極の極限が形式としての經濟的文化價值なると解釋すれば貨

幣概念は此の場合に經濟的文化價值の内容的制約に對して又內在的決定を與ふる一要素たらざるを得ないと思ふ。素より經濟現象乃至生活を一列に配置すべき一定の與へられたる方向が如何なる性質を有するやを決定するは畢竟經濟哲學を其の内に含む廣義の歴史哲學の任であつて、特殊科學たる經濟學の範圍内に於て決定せられたる貨幣概念とのみ交渉を有するものなりと云ひ得ざることは明かである。貨幣概念は只此の如き與へられたる方向に置かれたる經濟生活全般即ち經濟學上の凡ゆる概念に對して論理上の *Adhuc* たり得と云ふに過ぎないが經濟生活全般の極限概念としての經濟的文化價值と貨幣概念との關係を此の意義により此の方面から觀察すれば、人類生活全般に對して貨幣概念の仲介によりて解釋せらるべき一方向あることを許容する以上、此の如き經濟生活の極限、歸趣として考へらるべき當爲即ち經濟的文化價值は亦其の解釋に於て貨幣概念の仲介を許すものなりと云はざるを得ない。即ち其の解釋に貨幣概念の仲介を許す文化生活の與へられたる一定の方向の窮極に於て極限概念として經濟的文化價值は嚴存せざるべからずと見るべきである、換言すれば經濟的文化價值の内容的制約の論理的一因として貨幣概念は成立し得と見らるべきである。素より其の經濟的文化價值に內在する他の諸

々の内容的制約は他の諸種の文化價值並に總括的文化價值一般との關係に依つて定めらるべきものであつて經濟的文化價值と此等各種の文化價值との並列交渉比較綜合によつて茲に一個の文化價值の哲學は形成せらるべきものである。換言すれば貨幣概念によりて可能となるべき經濟學上の諸概念即ち經濟生活全般の歸趣として見らるべき形式的極限概念としての經濟的文化價值が全體から見て如何なる性質を有すべきやを根本的に究むるは正に經濟哲學の任とする處であり、此の如く解せられたる經濟的文化價值の他の諸文化價值に對する關係を究むるは正に文化價值の哲學即ち歴史哲學の問題である。

以上の關係は單に經濟生活のみならず、凡ゆる社會的文化生活に關して立言し得らるべきことと思ふ。即ち一般的に云ふて文化價值は形式として無内容としてのみ立せられ得べしとするは其の係はるべき範圍内に於ける文化生活の極限概念として解釋せられ得べき所以を示すものであつて、此の點より見て超越的心理學的方法によつては一定の與へられたる方向に配列せられたる凡ゆる内容の終極に於て一の思想上の飛躍を認むることなくしては Sein より Sollen に導かるべき途は斷たれたりと云はざるを得ないが乍併其の思想上の *gap* を *überbrücken* することを得兼ねて

一定の限界を超えて其の極限たるものを認め得る所以は *Sollen* が *Sein* をして可能ならしめ其の一定の方向を與へ得る如き先天性を有するからである。即ち *Sollen* は *Sein* に先ち之に決定を與へ得べきものであるからである。之あるが爲に *Sollen* は他方を變更するときには内容的制約を許すべき所以及び其の内容的制約の性質が如何なるものであるやが明かにせられ得るのであり兼ねて又此の如き一の *Sollen* の他の *Sollen* に對する地位關係交渉も明かにせられ得るのである。而して此の可能性は凡て一に懸つて *Sollen* を以て *Sein* の *Grenzbegriff* なりと解釋することに存し且或特定の一文化價值につきて云へば之を以て如何なる文化生活の極限概念なりと解釋し得るかと云ふ問題の解答に存するのである。之より前に述べた如くに高次的に進むで順次に *Sein* と *Sollen* との關係が繰返されても常に *Sollen* が *Sein* の *Grenzbegriff* として解釋せられ得るものなるによりて所謂思想上の飛躍も認容せられ、*Sollen* の性質も解せられ且 *Sollen* と *Sein* との相關關係も明にせられ得るのである。*Sollen* が一方無内容的形式性を具有しながら而かも他方内容的制約を許すことなくしては成立し得ずとするは一に懸つて *Sollen* を以て極限概念なりと解釋し得るか否かに存

すると思ふ。

此の如く文化價值從つて一般的に云ふて *Sollen* を文化生活從つて一般的に云ふて *Sein* の極限概念なりと解釋することによつて諸種の認識論上從つて延いて一般哲學上の困難なる問題の解明に一步を進ましめ得ざるべきか。是余が一の疑問として識者の教を乞はんと欲する所である。(大正七年二月一日稿)